蒼海漫々として言語を絶する仙
境の眺めかくのごとく美なる
なるも思ふの多きものみ
多くは峯子をして一日詩料の現
出に苦しめ毎々ここに画筆を投じて
ひとり嘆ずるにとどまらしむ

國會圖書館

墨容勝龍水翁性書画我好
奇也我多中ゟ生寫我よくし誌ゟ
繪所ゟ毛墨かきた揺き仿我最
第一ゟしる支なかゟ彼ゟ一事也
金田廣高ゟ〻ゟ毛或ゟ蓬莱乃
山荒海乃怒ゟる魚乃姿ゟまね
ひよく尋常ゟ山のたゝすまゐ水の
流なゟ我やりしく書なのしゟ
かたく拳ゟゟゟゟ紫式部ゟ筆乃
すさひ其始我ゟまゐ画工惡圖

犬馬而好作鬼魅誠以實事難
形而虛偽不窮也けよ鬼魅もや
すく狗馬もかくの雖然
勝氏ノ生寫乃刹處我愛玩す
る時もは是全く画家乃童ものよ
あるべき書家乃餘花たり繪花
者不画其香繪人者不画其情
ゆえや平茲滑稽會林秀圓
多年乃望生寫乃河魚海魚我
櫻木ヨ彫刻し書賈よあらん

玄ゑ水翁ゟ乞貰受成り就りて
後姉聟ゟ手より景ゑ求る人も
書畫船ゑ乗ゑ行ゑ玄ゑ
行ゑ人事草木禽獣昆蟲も
行ゑなり聲なき魚ゟ音あり
先人ゟ又かたり國ゟ從来好嗜
處乃狂句ゑ副貰情ゑあり
少なり今古滑稽作者多き中ゟ
山素堂ゟ水鳥乃青羽乃山藤ゟ
潜る俤ゟ初松魚乃鰹に

やちまた風情浅なる芭蕉庵桃青が
鹽辛鱗魚乃齒莖毛寒細痩なる
姿浅述水治徳多勇魚等太脂
體を作皆各乃好處ありく非是
論じ多かる事凡和歌ま九品十體
ありそれ面とを建仁二年春三月下旬
後鳥羽帝乃詔ありく三躰和歌乃
樣給はりそれを一坐一興乃事ありけ
ゑまるま點取及蕉門乃面ま
是自己乃臆見歟諺狂吟乃意趣

一朝一夕の興哉やるべきにあらざる
事なれども奇異の哉心を動かすに
博士の眼をもて嬰兒の戯れを云ふに
不足とや見給ふべき前にもいへる
素桃治の三句の三品を萬葉集中に
水江之浦島兒之堅魚釣鯛釣かねくと
よめる或を鯨と讀なせと本草にも不載之
鰌魚などまでく今宴ありと雖之器之今の
作者其情我よく云叶ふべやうに
もつて伊佐奈取淡海乃海矛乃浪の

おもふに鯨哉訓蒙圖彙爾首許
りを高く名を徳ゝ句又國ゝ功洪大なる
哉我養美ーく滑稽訓蒙圖彙
りを稱すること此画草紙乃實の
名を勝書師ゝ筆乃林硯乃海名
幸りゝ云哉國ゝ需ゝ應ーゝ
於道士井芽軒海濱雛子百養
言滿題炊書

一日龍門禅師巡錫を学寺に伴の
僧俗のうそうそうとして
あり是をみられた漁夫を画くうそう
寒そうな形ちの古笠被を
て芒鞋を結古杖をつき諸国の佳句を
ものもし何学の名ものうそうと神

代筆雪中にて認め出し
海内幸とよろこび候

魚を煮熟を出し
汁すまして仏を
して主義を
の指図を
魚を
小

一村内二船生を見る乱る伐り開く
一叶の魚あるも他句を許さず
一魚の多少を論ずる事なし
年かぞえを初むる日多名あり
元禄七年春二月

許水

○こい　鯉　為魚王

有五色名曰
赤驥　青馬　黑駒
白騏　黄騅

一種通身紅如金曰金鯉
尾如鳥或三岐兩岐曰金
鳥魚

赤鯉を俗ぎんとよ

むつさねよ申すもあま

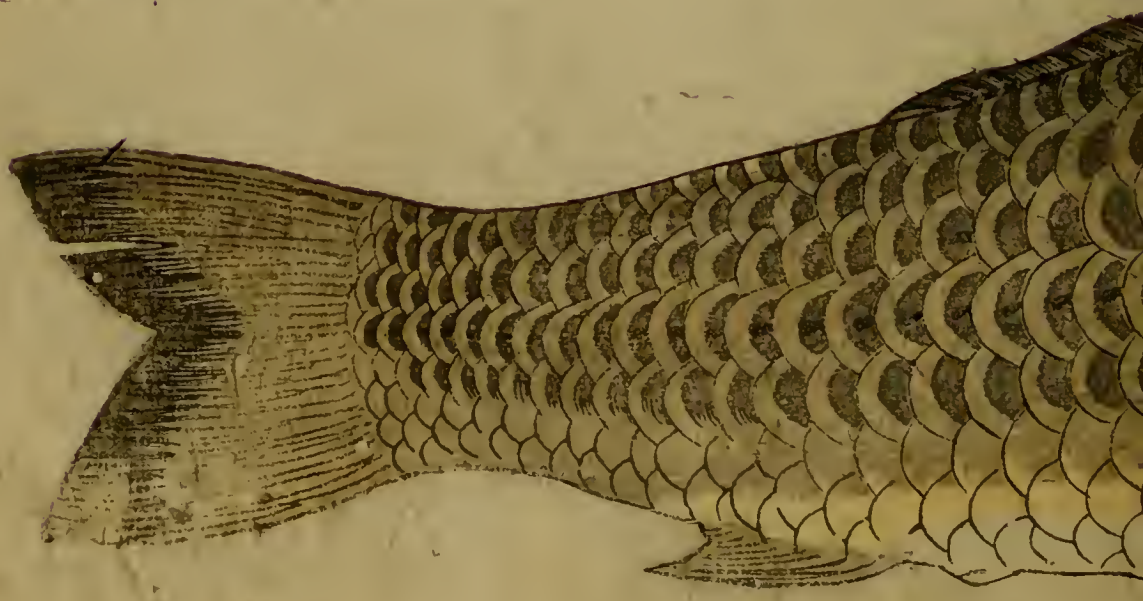
うまほまち

ふくしま

江戸紙

洗鯉

李冠子



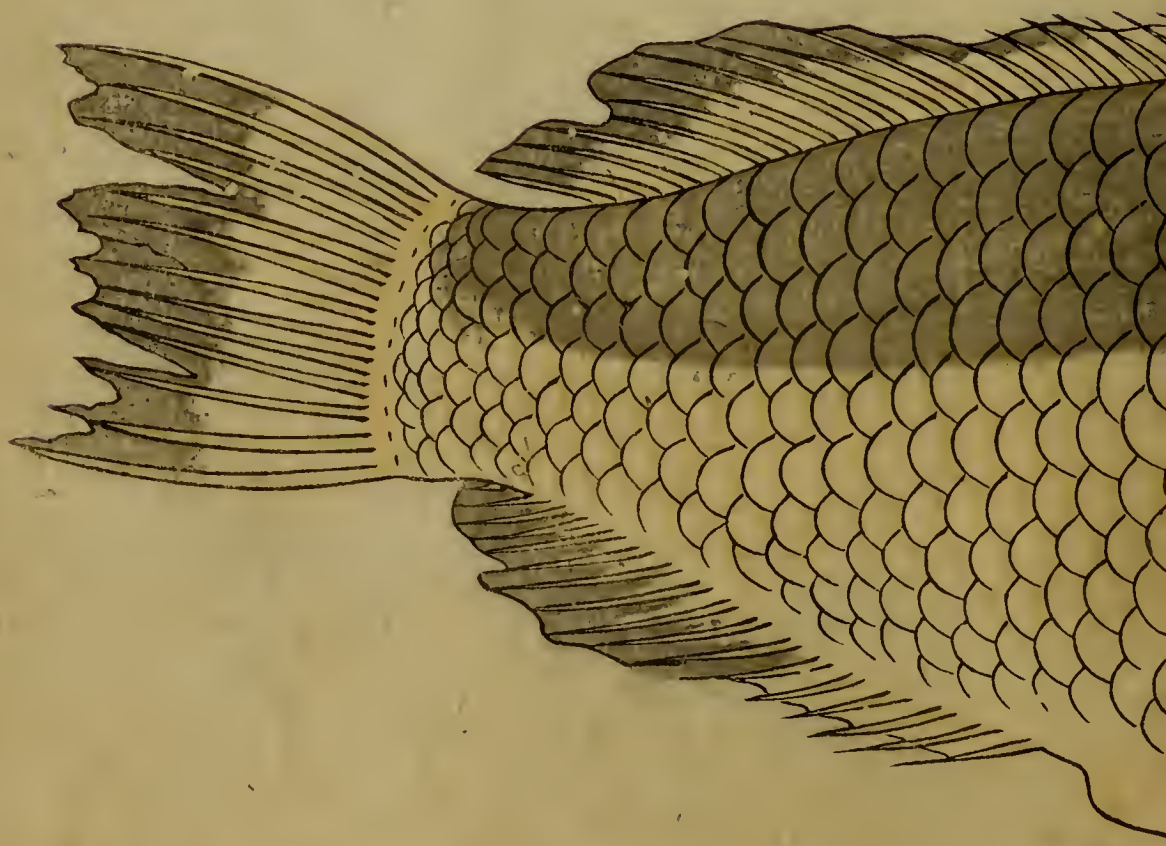
○かんぶつ

山中

彼岸朝

平壱菴

岸社子



○たこ　章魚　章擧
　　鱆魚　八梢魚

浦さびし芋盗人を
　よふ歌仙
　巨洲

名月や砂まろ
　ぬこ跡の
　　音湖

出て遊べ子ども
　ゐぬ木陰ども
　　時

○ 望潮魚

旭道

○ 蛸

喜節

○ 四ま

百龍

○ほしがれひ

和漢三才圖會ニ出ル

杜若

星鰈

第一

指稱ヤ茅ヶ沙干弦

用ヒ方ハ

厚キ小深キ皿ニ

酢醤油

○あるい　顛　石決明

和汁や飯と飯　一鳩

和思ふ

玉ハ志ら　佐保丸

海士も飯もうるはし

鳰化して

春よむらくも　白明

いせあるい

剥

○すゞうちを

雪望

川妻や漁舎ことに苫の内を

漁舎ことに

五雲

うかゝひて苫うちを

貫町

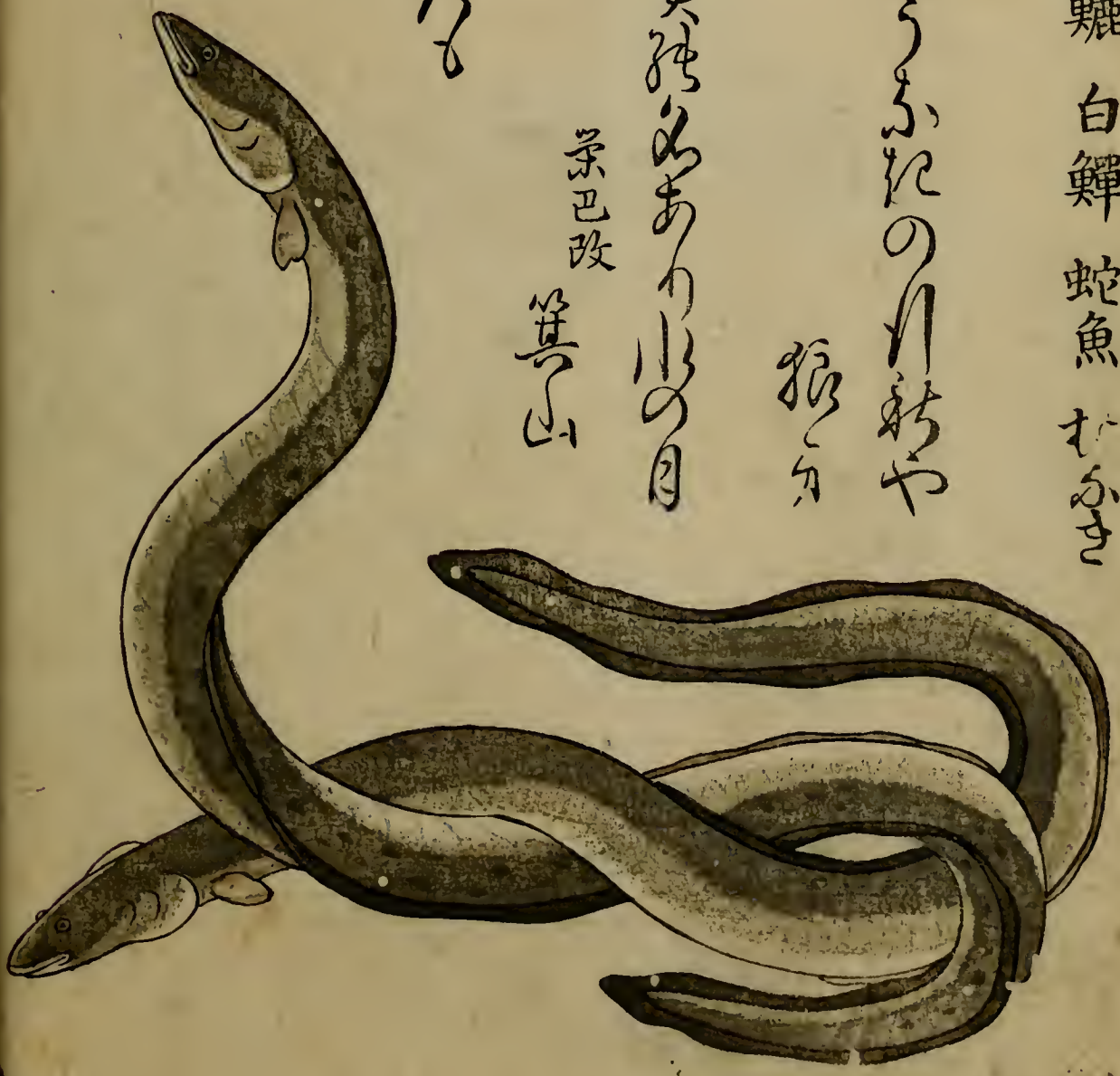
富士照や小田原町の苫うちを

○うなぎ　鰻鱓　白鱓　蛇魚　又むろき

梅の花を浅くうふねの月哉や

宗巴改

笑山



蛍の小さき影も

夏の

なつの雷

鬼雀

○くる海老ゐる　小をさゝやまた

鮓くめてくん蛸　大物巻　子巻

糸もの車鰕

祇園

汐干狩くまて

かくふる車鰕

○車ゑびゐる

猿猴と月をゑがきて車鰕　蕉風

○寿ぐ里　蛇頭魚

すはまやまの中の一ふ

祇堂

羽根田鉢曼女

○さで　青魚

○きうを

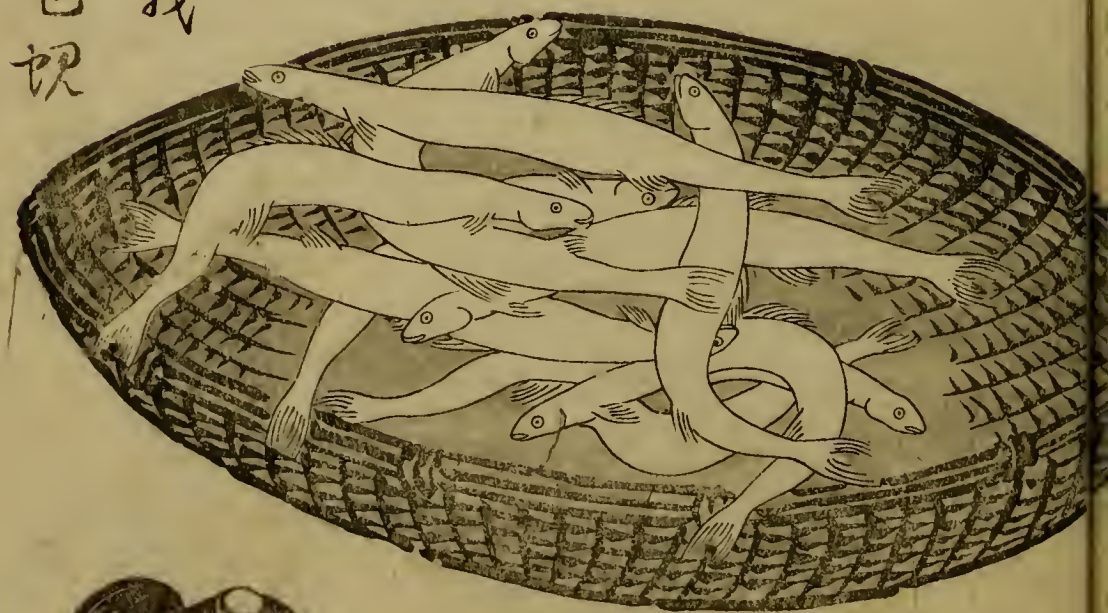
鱠殘魚　銀魚
王餘魚　水晶魚

白魚やちさい魚肴　麦窗木螯
　　四ときくさ
　　物堂
　　窗雪

小魚や網の中なる　ふき下
　　賀義

○ちぢみ

りぬ中のちゑみや花切



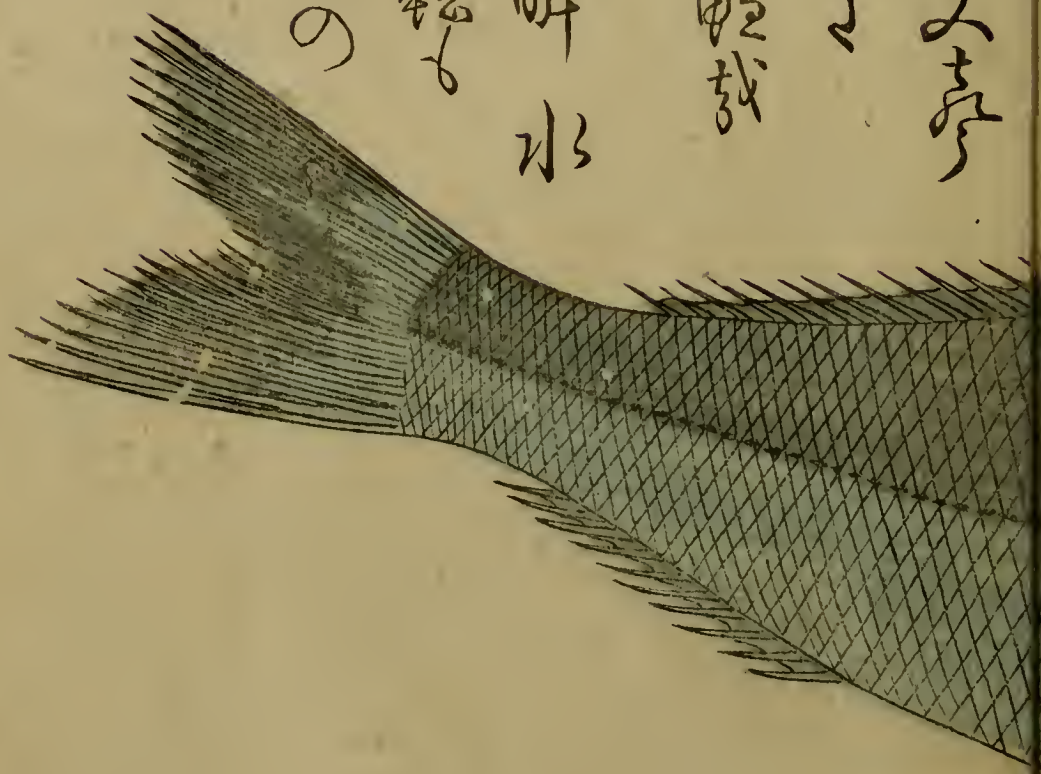
○すゞき　四鰓魚　天下鱸ハ両腮
惟松江鱸四鰓

清盛未タ安藝守タリシ時
鍋モテト下知アル舟ノ鱸哉　卯雲

初風の落あゆ〳〵来鮠哉　射柳

揚屋う〳〵生姜も伊達や　牧童

汐鮠



久夢

魚狂我を示すべく
呼んで鰹哉

畔水

名山や鰹魚の絵も
てんやもの

笹の葉と
おくるあるじ鰹ふ

晴李

○ふのーろ　鰵魚　鱚魚　はも
一用鯛

きちきちやうろも一日本草の上

牛子

○もぜ　鯊　杜父魚（ダボ）　道滿

シマハゼ　種く有說

素義

和名抄に諸ともあり

鯊の旬

梅のうち鮭

祖平

月と言ひや

鱭魚 鱚
鯊、 望、 鱚刀
魴、 鰭 魦窗

○多ちうを

稲妻や雨の目めく 多ちの魚

古刀魚や平家 百嵐
沈めるあらら

○みしおうを

義人乃ち社こそや 茶宝
にし沢魚

○ふぐ汁

十月初めより二月迄

雪淩

小春日和ふぐ汁

越峨

ふぐ汁海に行や

小そでのさそひ

朝

○文蛤　花蛤

寸卑

○きちこ　ヌちやこ

翠井

○蛤て　蠣

一の宮

○ 奴々 河豚 鰒鮫 鯛魚嘆、
吹吐、氣包、西施乳
鯼魚（シヨウサイ）

對陣乃ゆるやかなる
ふくふく
かんかん と

魚偏に豕と云ふ、
心の偏

肺肝

陳言之務去

金行

觴も肌肉

河豚汁や鍋の下より
吟ふるし

蟻来

河豚見そこう
其角の后矢の使

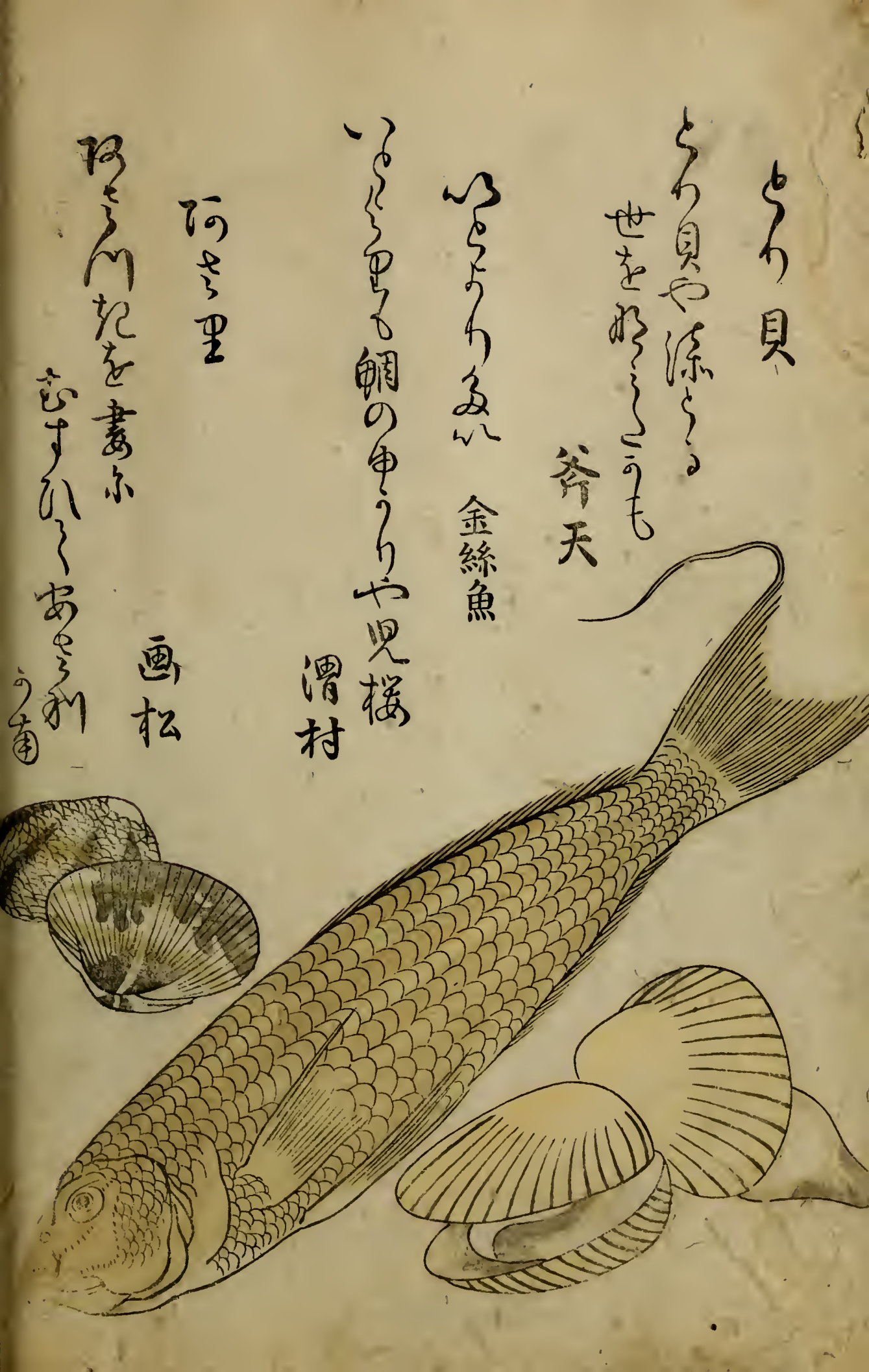
風ぐる

蝶々狂句風おそろし
夢人叟

書そ

あのろい

海鷄魚　邵陽魚
荷魚　鱘魚
鮪鮅魚
蕃嚏魚
石蠣



貝
貝や添ふる
世をねがふこのも
斧天

金絲魚
ふるふりあふ
ふるき世も朝のまうりや児桜
渭村

画松

○うみ 螃蟹 雄 蝦蛄 雌 博帯

郭索 無腸公子

海河川澤山石の間
数種あり

猪渓

うちわ蟹もあるその
格有

あしこ
藻のもようあるもの
脚のたてじまあり

英輔

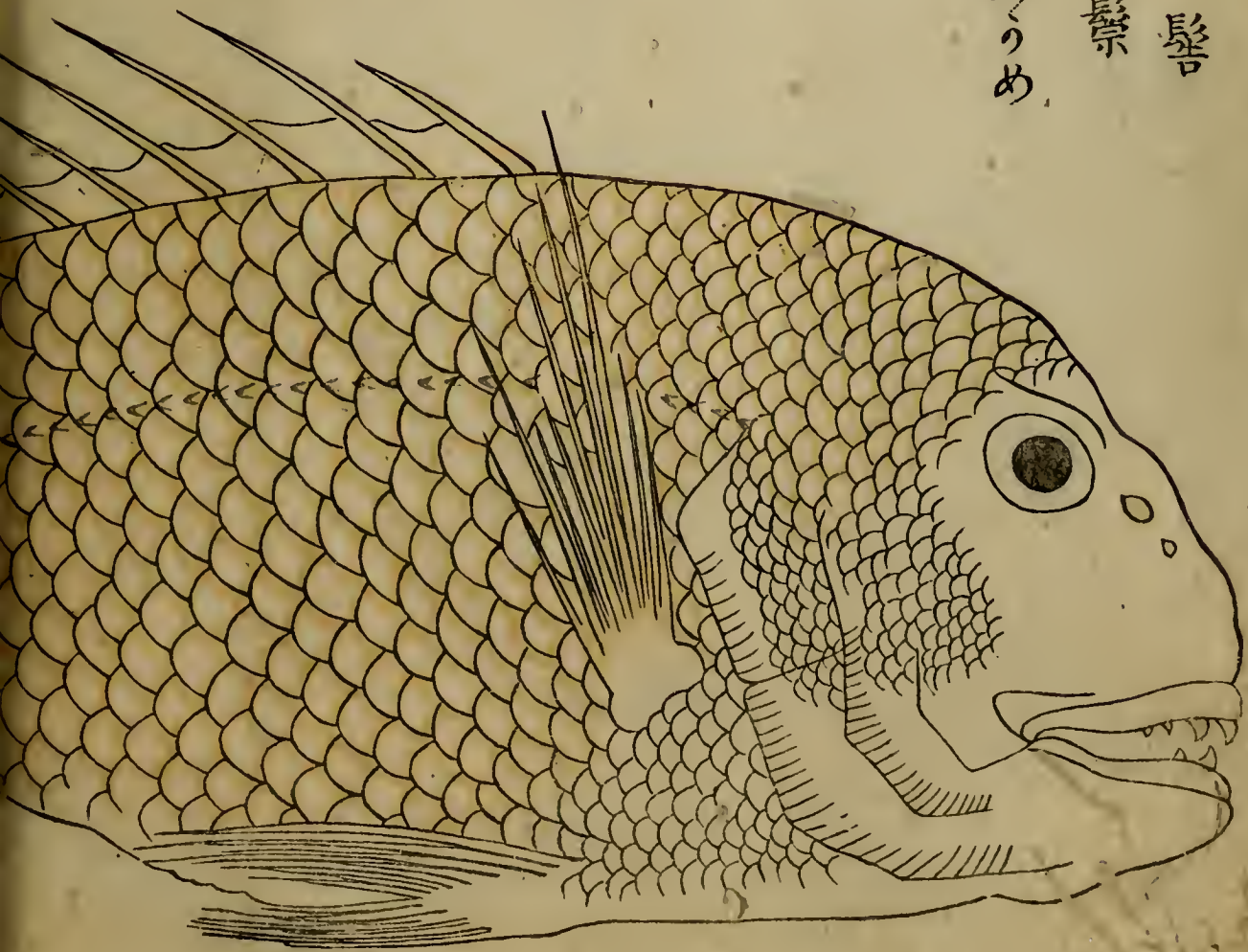
沢蟹 そのうちの
蛮より

○ 鯛

棘鬣魚　吉鬣　髻
斉、過臘　赤鬣
平魚　櫻鯛　あこめ

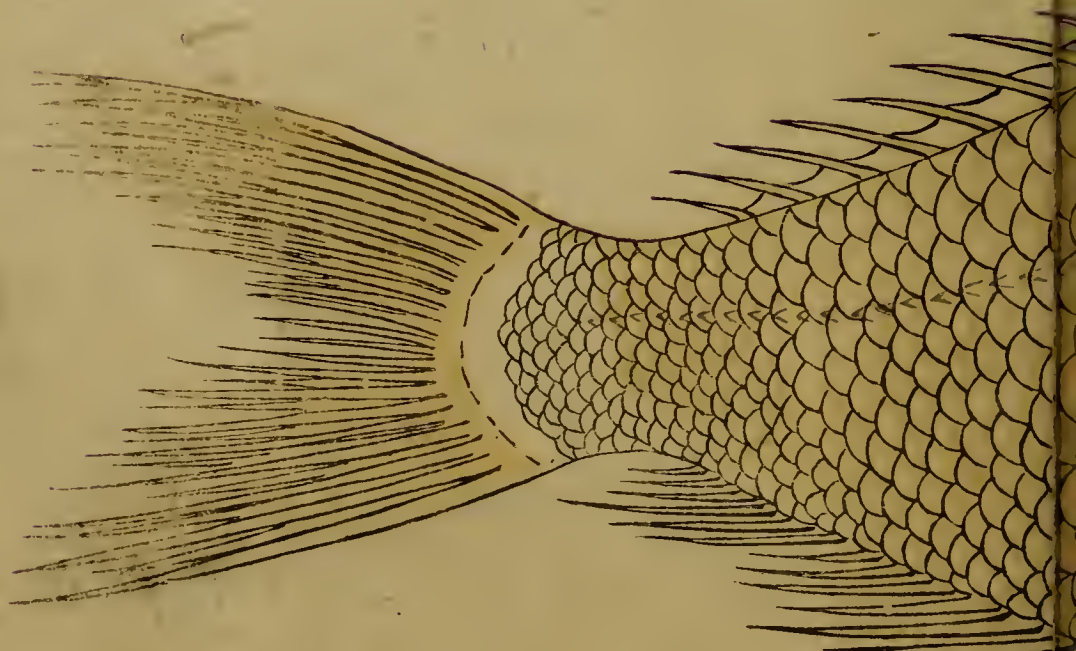
たいハめでたし
こそのごとくめでたきあこ
魚まさしく平魚と云里

萬海もちくら
日和やまめ魚



稲守類魚
亦也鯛魚
歟誓錄

汀雨



○めだか

ひとすぢの流の銅にめだかかな

長秋

○小たい

こだいもその志の苔ゝ

風律

小明朱

鯛江

塚山の一重ざくらや

○ぬか鯽鰭鱈

蘭

○おはこ

斧雪改
人形

友川　おはこといふ狂言
袖の留

富士の雪きゆることをねがふ

おはこ

○ほうこ　鰹

鰹を死ぬるの害ありと
ふハ幸をうばふとかや

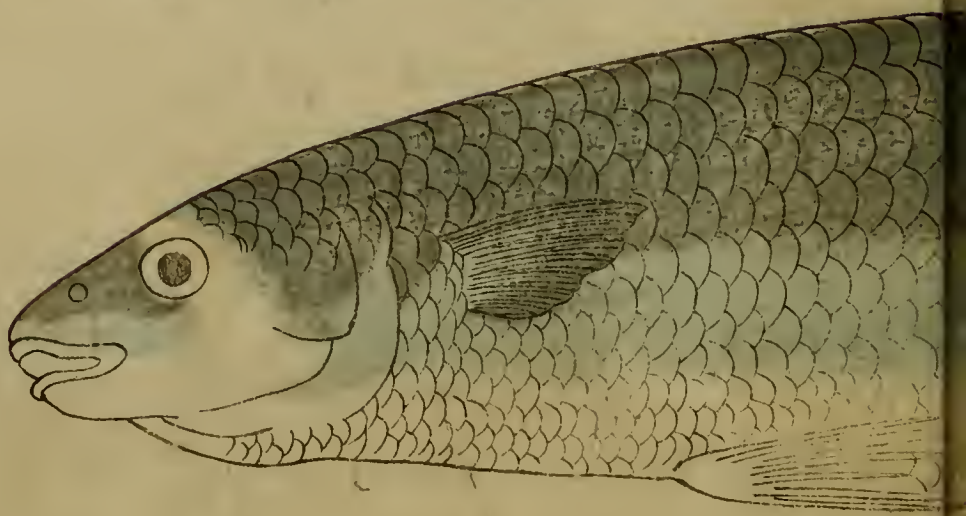
高松拾系

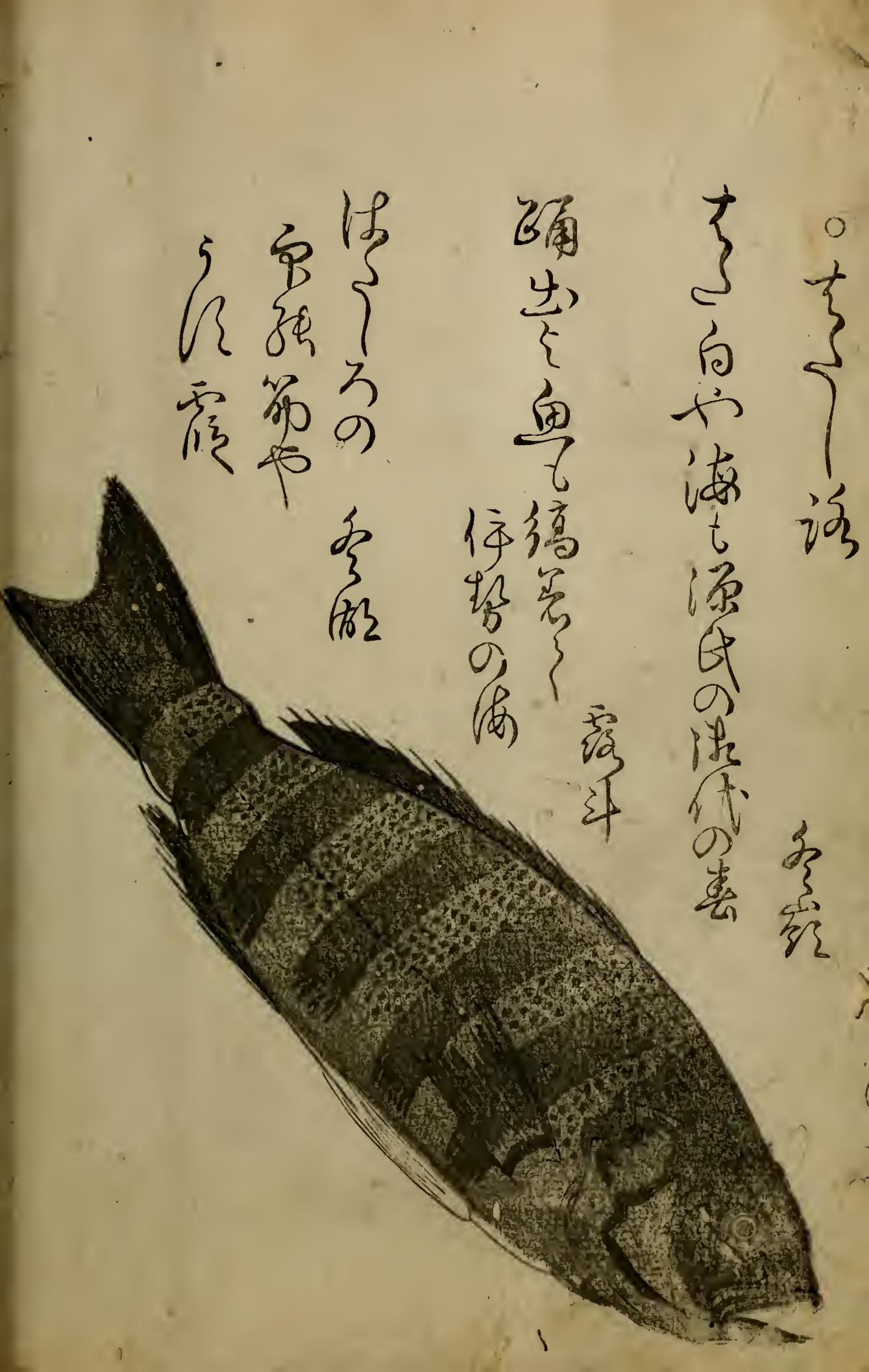
釈門もおはこの
ほうこや重蔵人

来汤軒
花考

思遠堂
亀貝

月旅舎
好雪



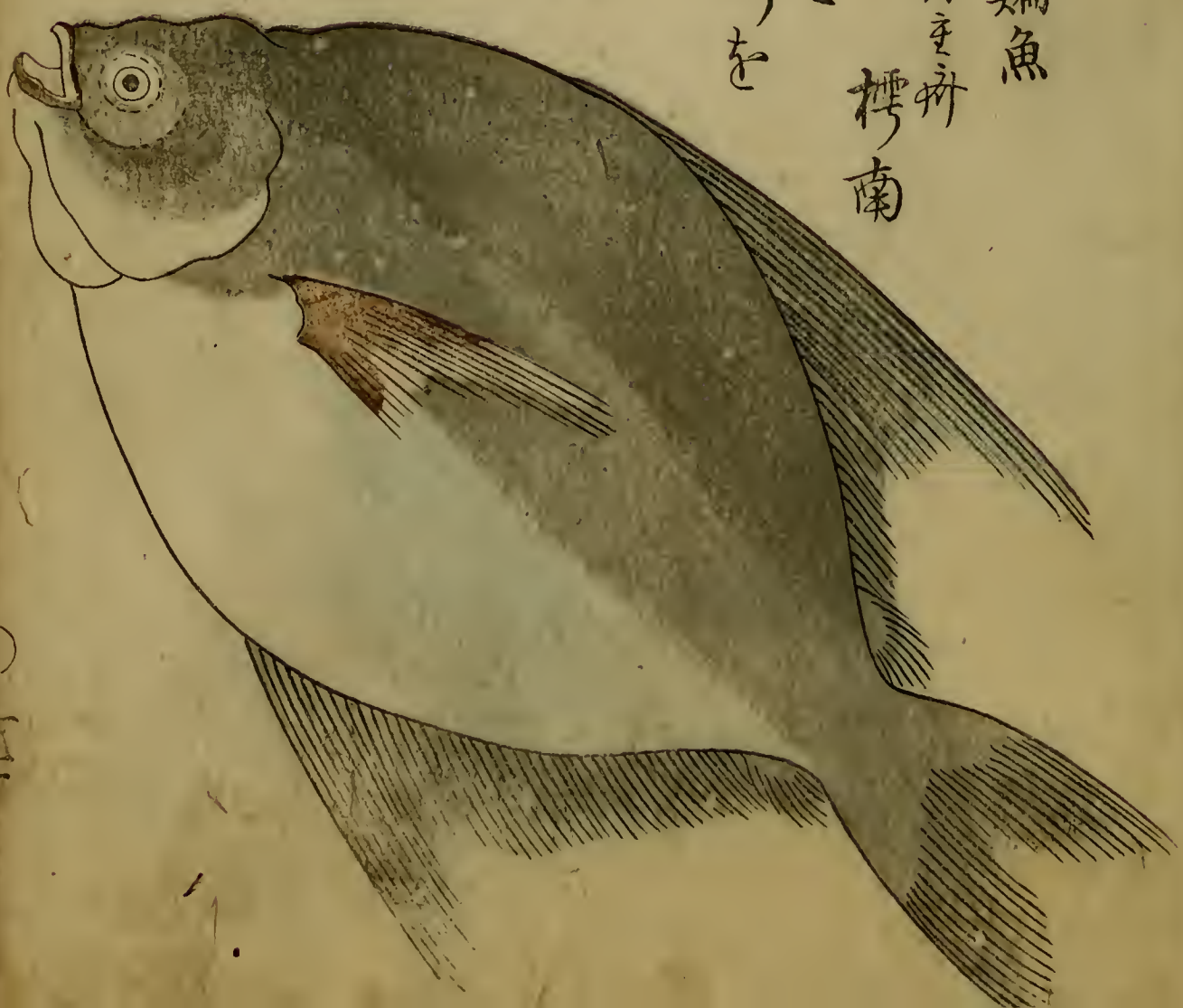


○まんぼうを　勇魚　鯿魚
　　孫文府　櫻南

さふものゝ画もあるを
ほんぶうを

音うつゝを
江戸乃夏うぬ
まんぼうを
銀海

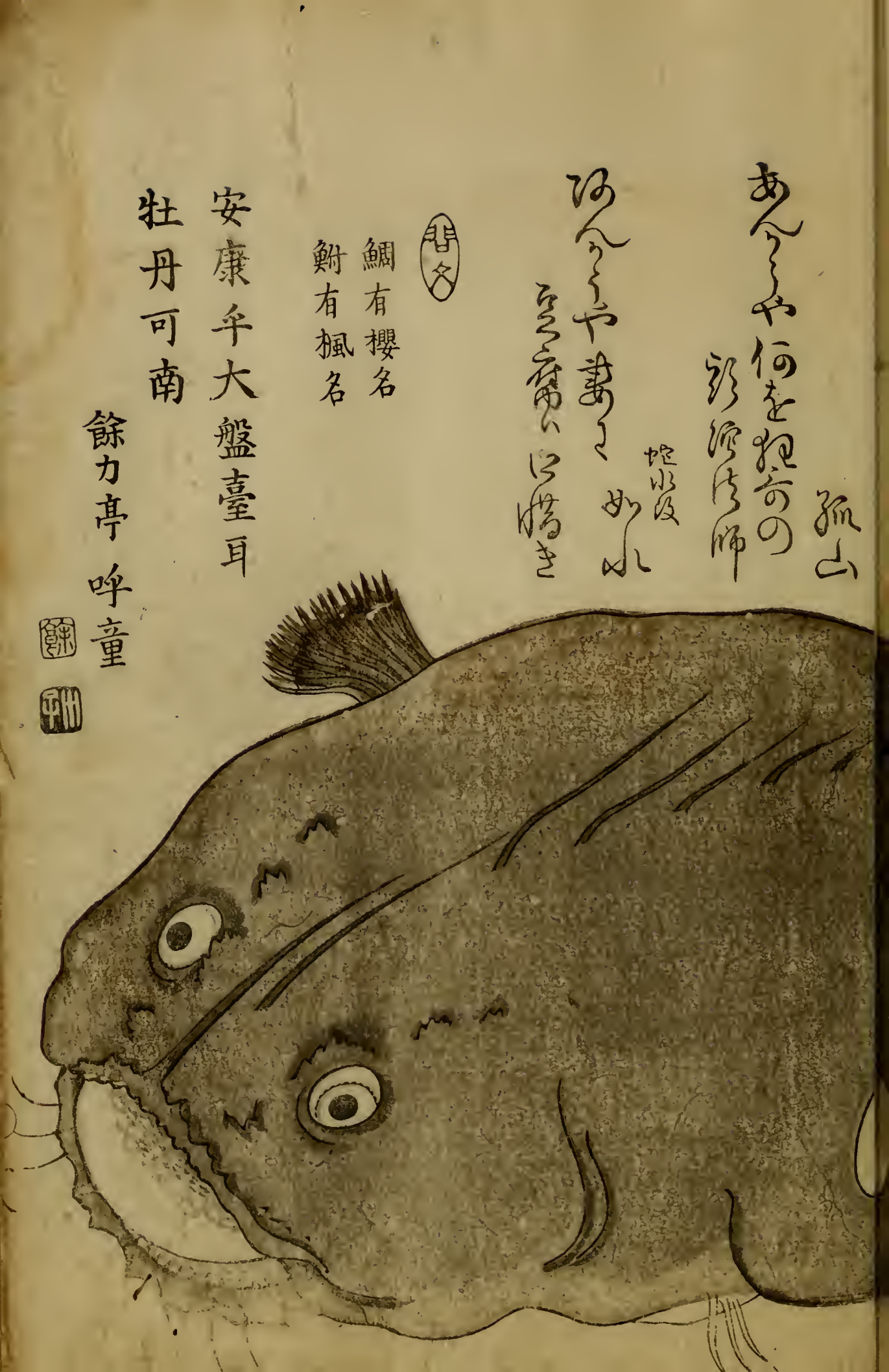
連尺



元治元甲子年初冬
まんぼうを

○あんかう

華臍魚　老婆、絞、琵琶、



○あゆ　鰷魚　白僥　鱚魚
鮎魚　記月魚（サビアユ）

八月之末研あらの　芝翁　海皐

東海令　亀汀

京加川
もの早老鮎小鰷の事

英哦

英鰷強岩切通し　打裏ゟ

○ 鯉そ　鱒

鯉

○ やまめ　鰍　鶏汎居　錐社

十磨

○この外龜數種あり

龜のよな皆出掛ゐや裏の花

元日や龜も甲羅を干さうん

莫大

流れ木へ片手を龜の妻うめ

部梁

蓑亀や已うなをち国土

うらふく甲ほす

亀や秋の白

卜宅

亀の歩みをあゆまをおくれまじ云

女 皐波

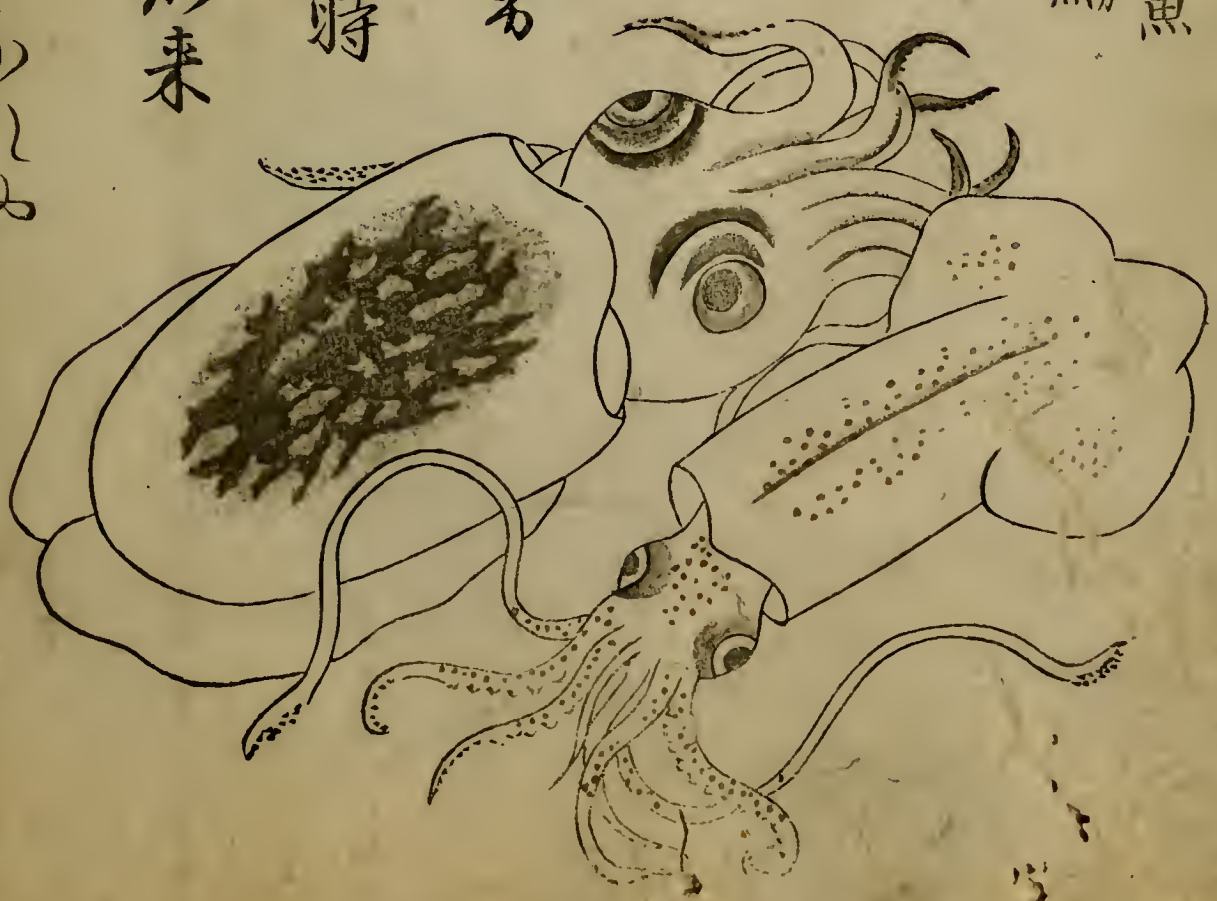
烏賊魚　烏鯛　黒魚
纜魚　柔魚（スルメイカ）

汲上堂
鶴波

白魚
鯊
烏賊の骨

烏賊
青和えの
盛り時

八十男
知来



○うつを　松魚堅、肥濃、

うつをといふ魚ありよくあぶる

来ル

春の末ツかた忍ぶころ

魚の棚　　起圀

あぶり魚幸よのものも

咲あへる　　治慶

かくうて
風を切く初つを

粽風

初ものよ誰何と夏ふ
新艘

宗桐

旅人の
庖丁ならす杉魚み

十二

○あわび　蓼螺　赤螺　十曉

○海ほうづき　うに　海栗

○ホンマス　鮎　鰍　鰤　鯷　鯵

夏

文魚

ぬるむ水よりもまづ川ぶくれ

文

冬至の池ぞくもりよき

頑嵐

ホンマスの角

秋

江の秋を
湖にあまりの
ゆふ哉

都十

冬

ふるかつら
鯉藻
雨

波音や蘆まで
寒き
夜ぶり

文鰩魚

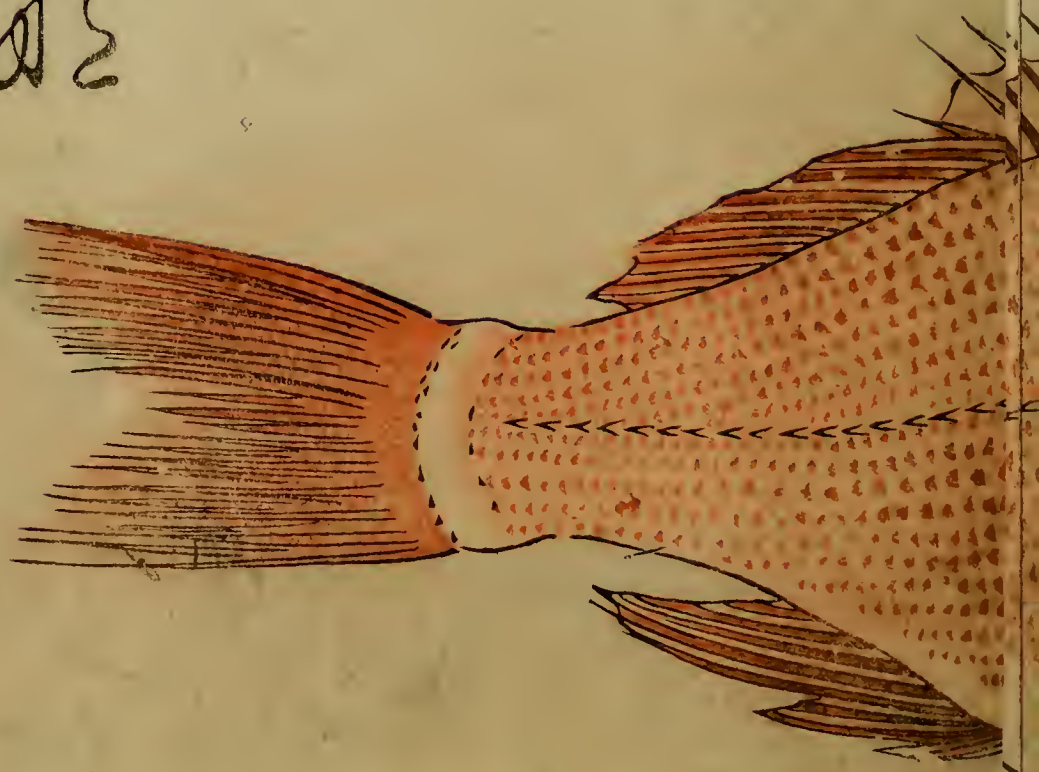
○そひうを 飛魚

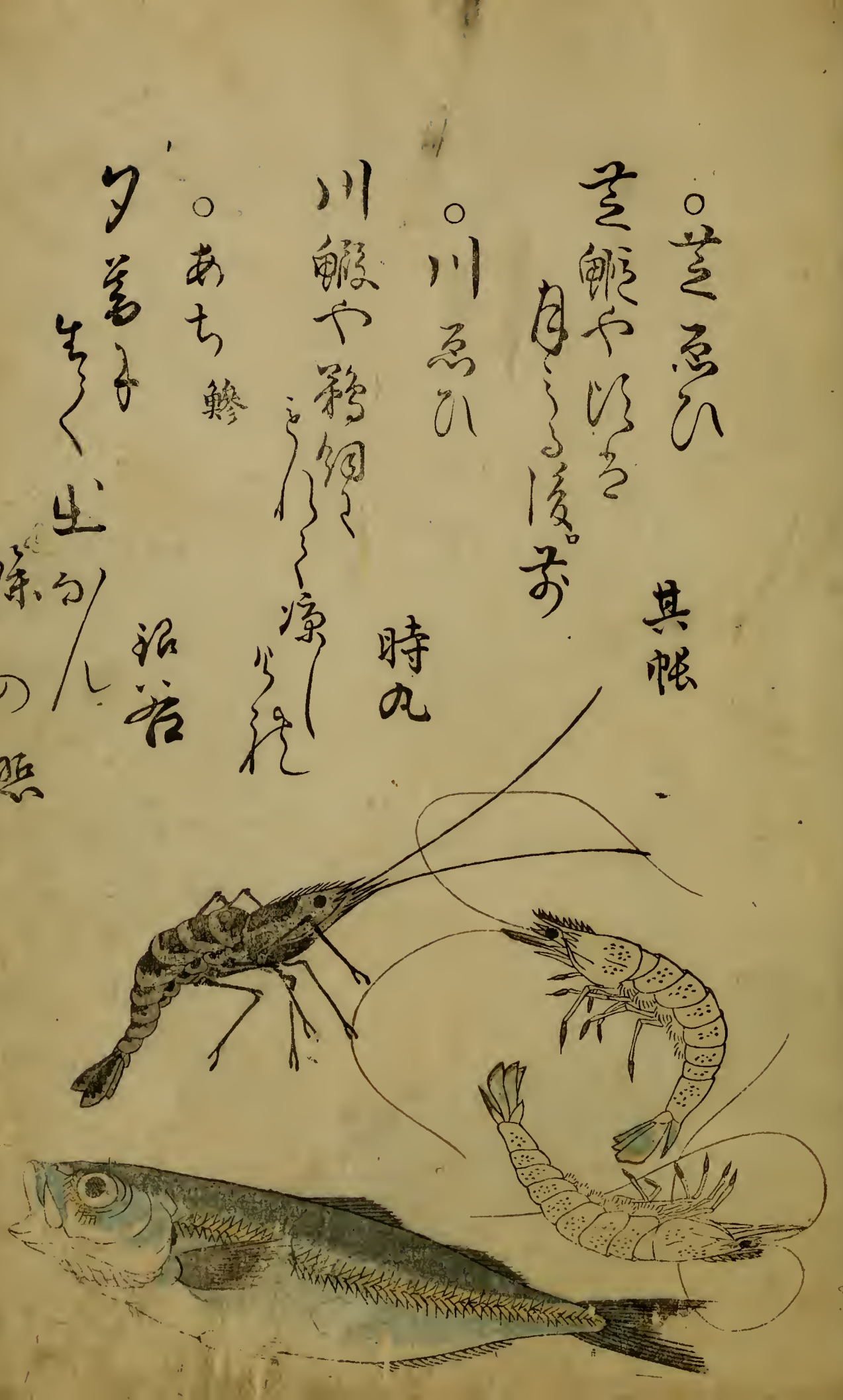
飛魚や
鰯を洗ふ
あらひ
可嬉子

地

○もうを
狩人と
藻魚
おまをん
ぬゆ
もとも
まぬよ。

赤魚





○まて　鱒魚　鮫魚　赤眼魚

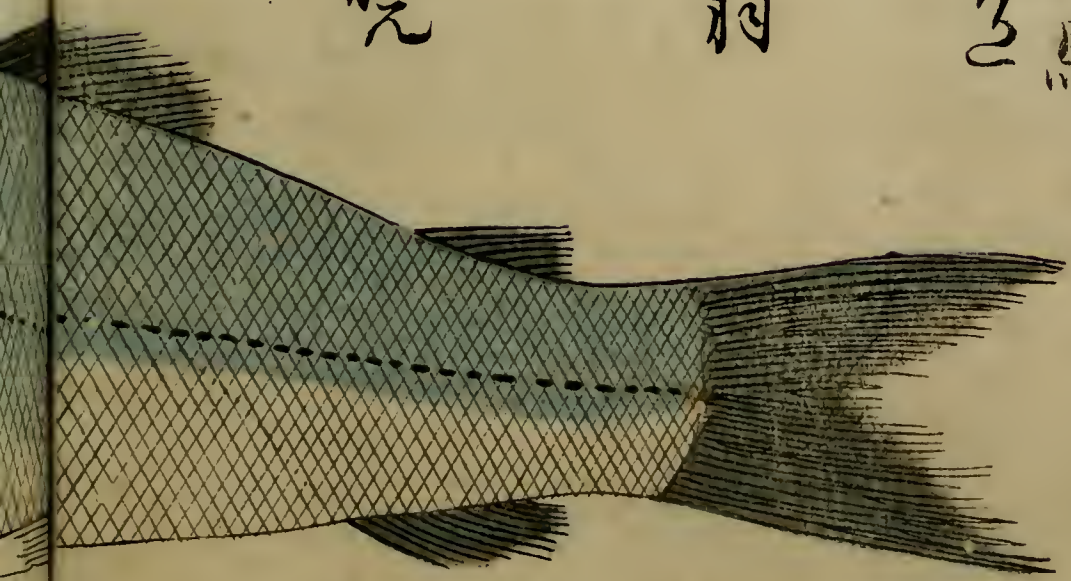
和の字を付るもの多し　形ハ

忍岡ぬ
玉馬

鰭突中已の魚も混ず

翠羽

川魚りや鮒も連立



悦暁

時ありや鰍よりも鮎の元生涯　法雨房慈雲

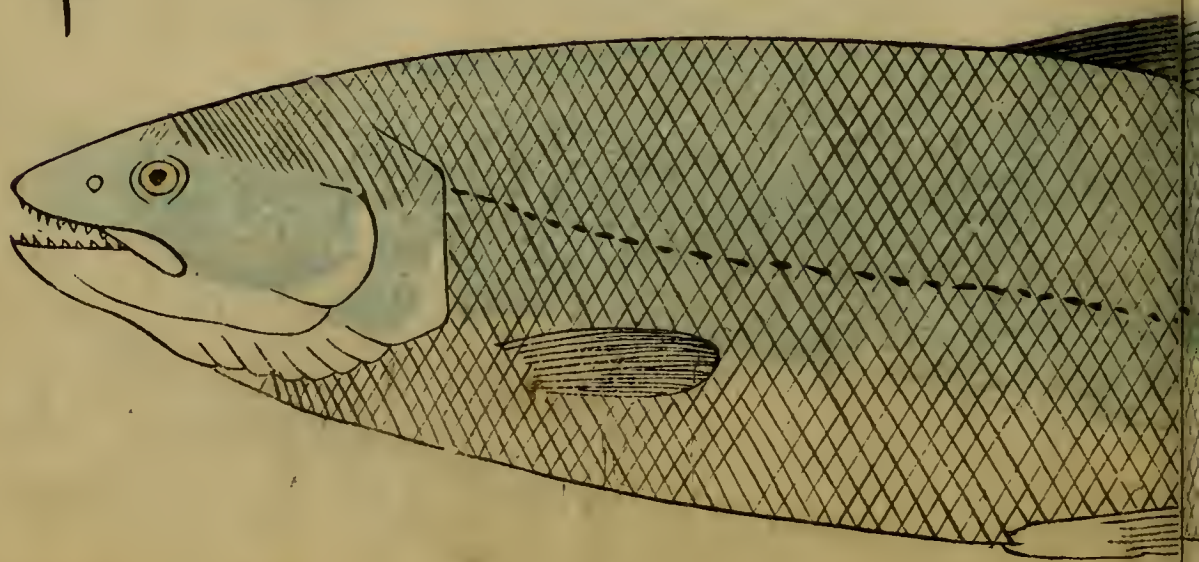
山川や魚木こゝろほる鮎の秋　市朗

梅漬の甲うりや鮎独一夜鮎　渓嵐

孫父云鱒好獨行尊而必者

あゆあゆと鮎をいふらん　左申

京と川



○あいなめ

○赤ま出　海參　海男子

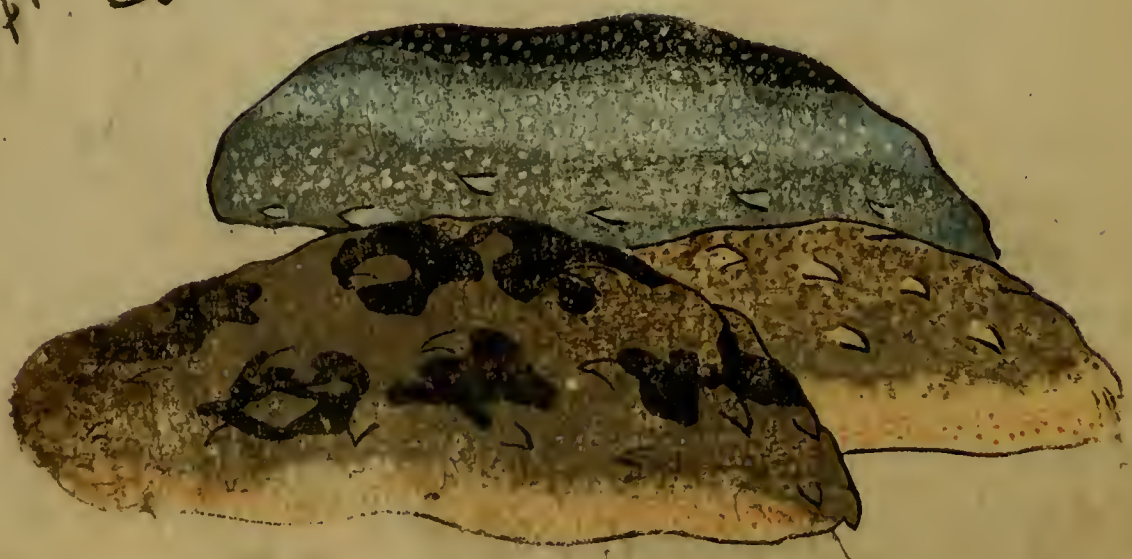
琴松亭
梅隣

搗栂もまだしらつゆのまくず哉

古井菴
如雪

尾之鯨の世間を吉野の浦嵐

北へ向へあるまじ栂の海嵐哉



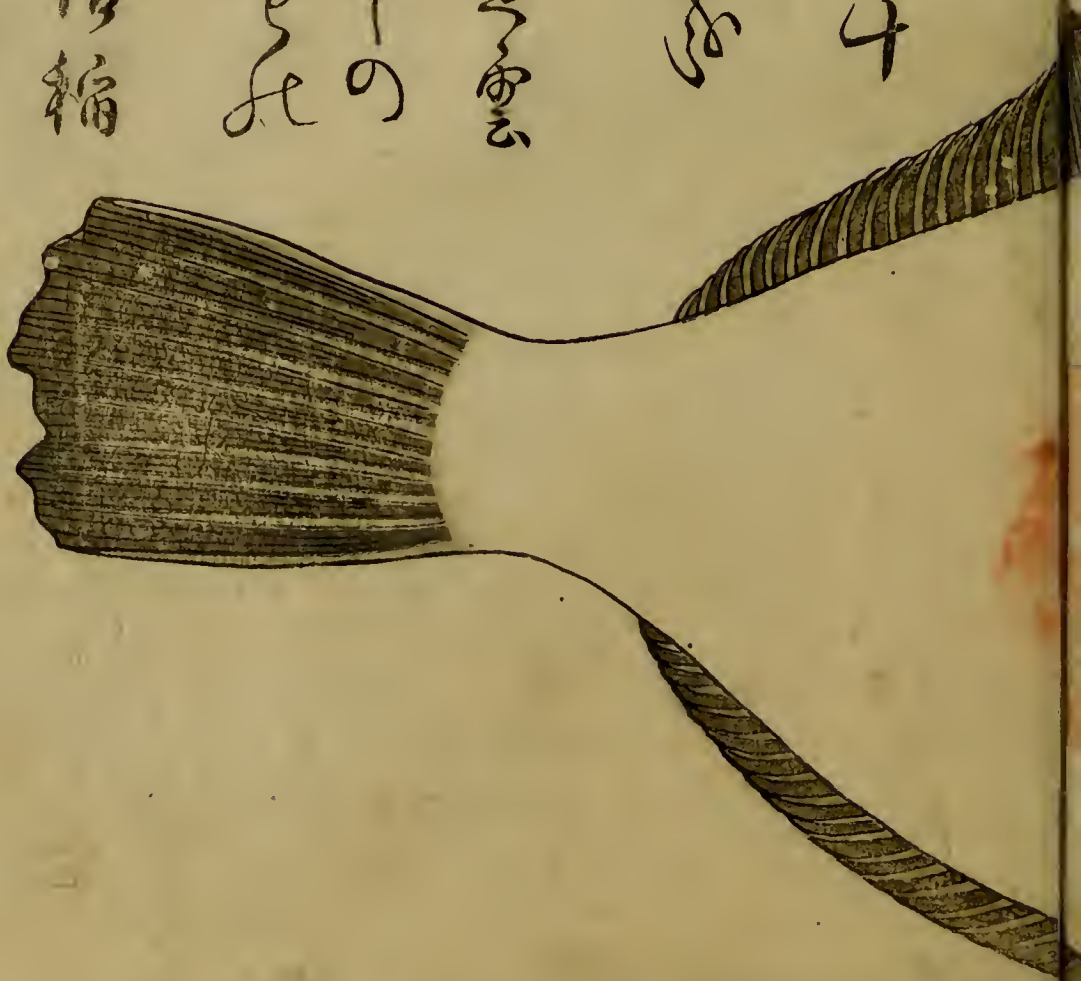
ひらめ　比目魚　鰈魚　版魚

當國多く片方い染ぬひらめなり　五湖

狭文ゝ紋のちがふたひらめ　加屋

岩槻

何事ぞ汐干ゝひらめ



○たこのみそ
酸交くらげのみそ漬
お喜こ

洞什

○ふくふく

仙橋

座仰や拾ふ蛤の
うこ四こ

○うこ

冲若

人の手
酒うこを
指食う

○笛吹ゑん

江の深く

笛ぬく鯛や

海さくら

聽雨亭

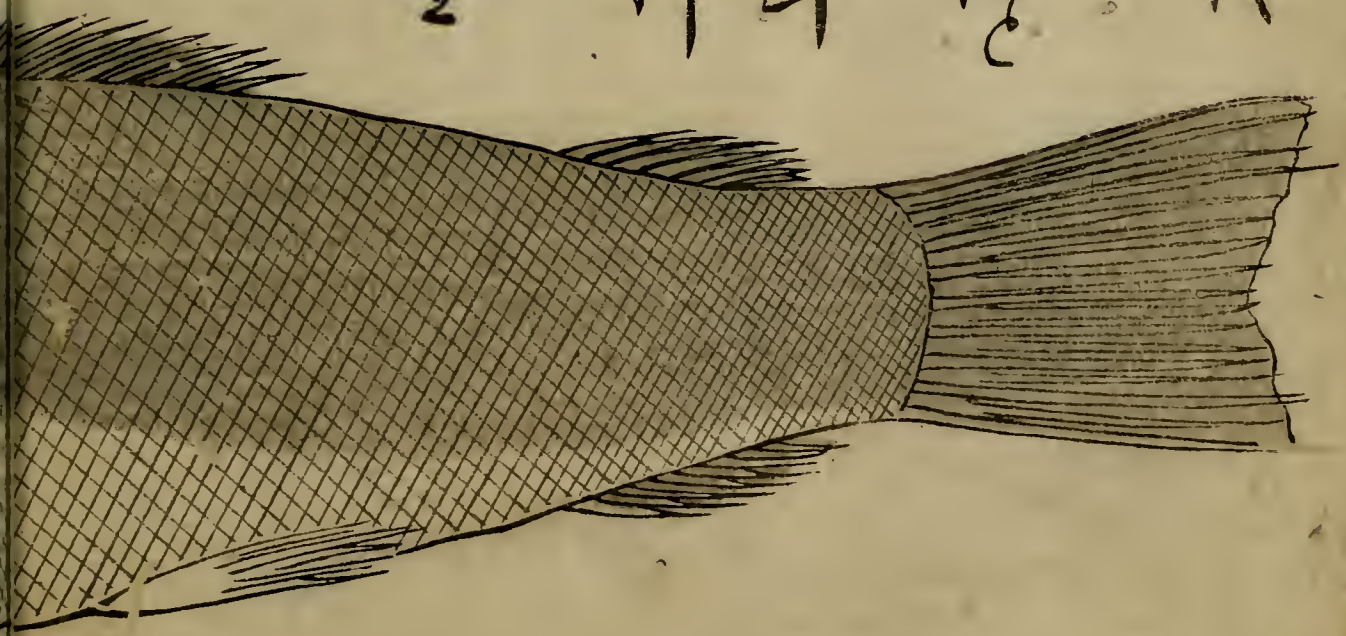
水路

○さけ

おさけや吸物椀のうらよ　一茂
月出る

さけ八ヵ坂の雪し吉野川　松十

おさけや笹と松川のいろの一　春里



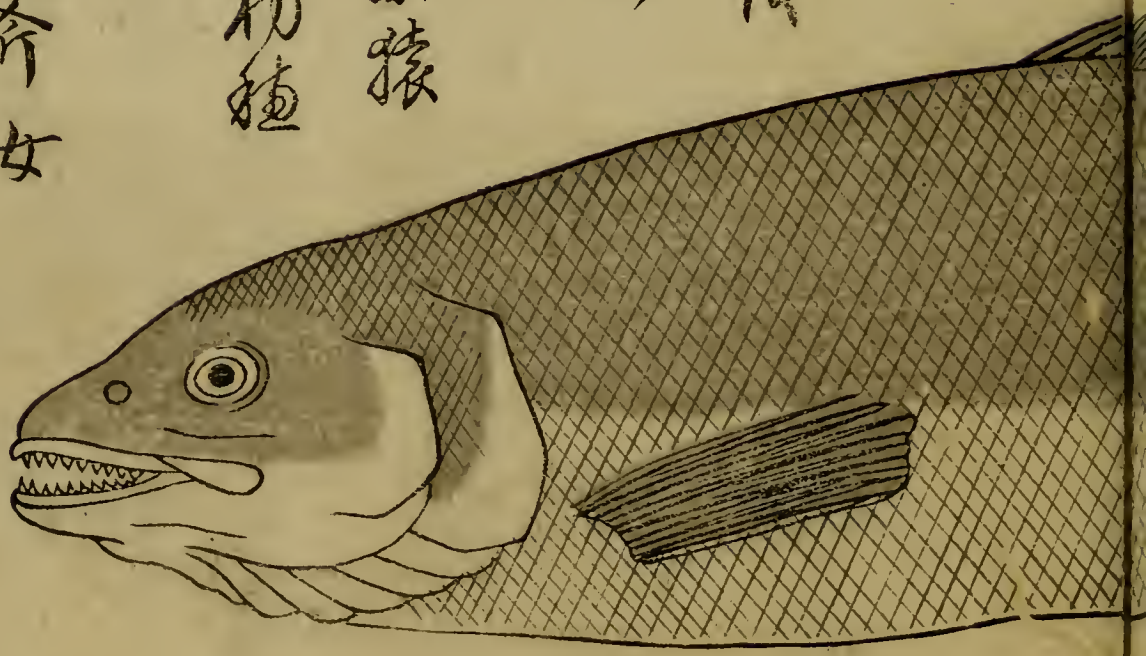
初汁や鯉こく同見、の旅姿　女　紹益

むくり切ル感勢や汁の　素猿

嵐初鰹

玄川の酔もやれぬうん　斧女

上りさげ



かながしら

市町

桜鯛も
こういう形
花の
咲く

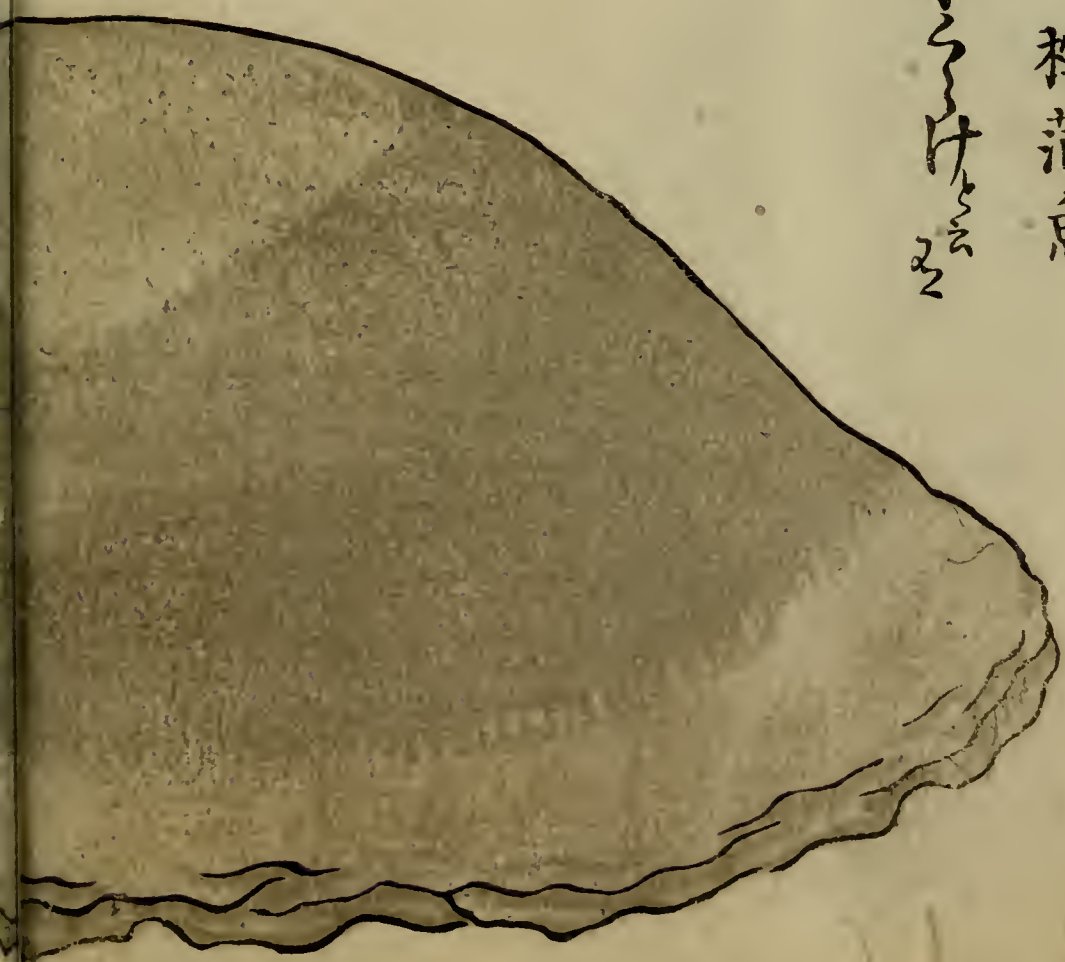
箕社

真こち
うしのした
うしのした

方言 的鱼 かながしら

水母　海蛇

石鏡　糯蒲魚



志成ぬ

水母

うみ

平汐

○かまつか　梭魚

湖閒

富ハ妻の尽さゝやちう魚を
鍋を梭なぬりる　女　枕絲
うまさや　秋の水

○あゆご

多ゝ
葉の
芝も
化ゝるあゆゝ

○かたこ
ゑ梅く
雪の
はなり
うとうおも

五孫

うたふ千
小ふの海士の四月うゑ

談多

○きちく ゆうだ
世のまや形ちも
ゑ梅く雪の海

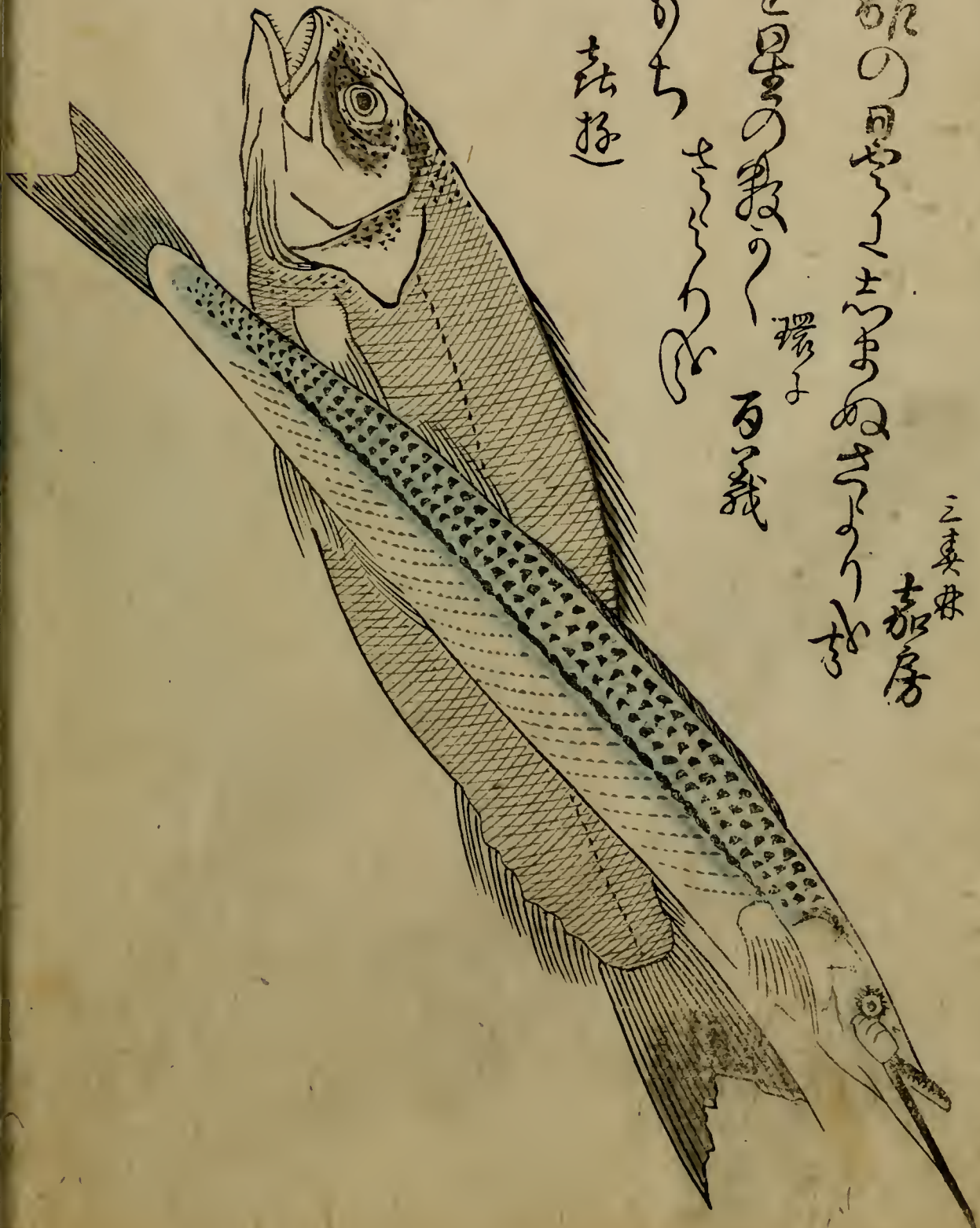
游文

○さくら魚　鱵魚　姜公魚

葡萄酒の酔さめやらぬさくら魚　環よ

洞よりを星の数のさくら魚　百子義

○いりもさくら魚



三妻坊　嘉房

○さくら魚　春迷

多摘む

うるむ

秋の係

○おこぜ

おこぜ　　宗窗　水鶏

佐保山姫を笑ふとて

○志まあぢ　　連むすこ

魚族の蒼ざめを志まあぢとり

海鼠の志まし　　桂柳

○さざえ　呂宗庵

はるばる奥そ　狐車

ざざえともいふ　雛祭

○ぜい　枚

さいのかみつめて　鯉山

おもを潜りけり

○みるくい　淡菜　海蛙

西施舌

海松食や　桂舎

時鳥なくあま濱の

○あかゝい　魁蛤　瓦屋子　伏老
瓦籠子

赤貝の赤も淡や岸うつり

長寿の宿
里朗

○さゝら　栄螺

筑紫なる須磨の浦なる栄螺貝
裏紅

雪汁栄螺も赤き朝餉哉
湖舟

○むつ

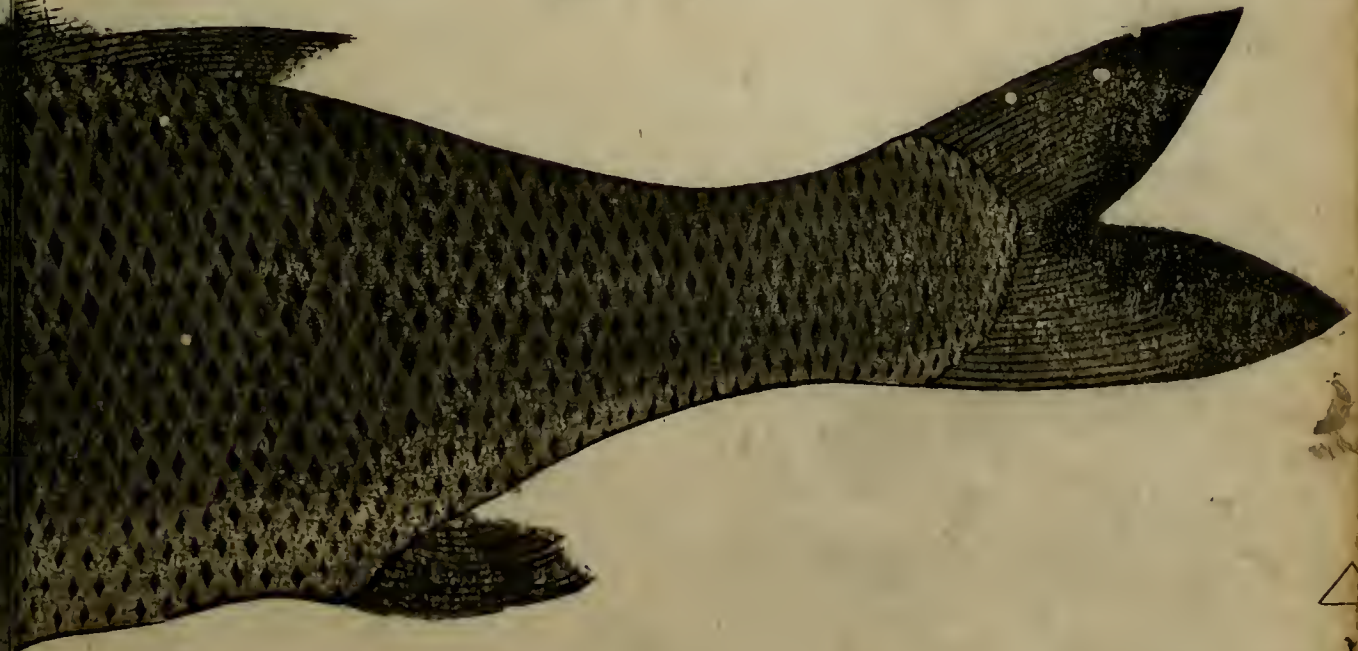
むつ捜こゝ迄家河ん　五鹿

肩敏、眼の玲こゝん　濃英

睦ミ月　むつの魚

婿のおやむつの眼　吾山

えるゝ魚の居



秦和亭

其躬

○かき　牡蠣

牡蠣より海苔干　如皐

深く拾ふも

○したのさ　鞋底魚　閩書　鰈魚

又ひらめい　左目明右目晦

桃の海よりふく白魚

半の吉ひめ

○ちやこ　石楠花鰕　鰕姑

青龍

四はいの　ちやこ黄

ちやこのさまを

ちやこれひのりめ

○うきゝ

鯧魚

俗 滿方

○さゝら鮫　馬鮫　和漢圖會ニ青斑魚　小ヲ青笹（サゴ）前

萬葉集ふいにまもれるしわさゝらを

漁村待電光翌究
得是魚

紀鞏

萬葉歌の頭をあしきりさゝらを

壺谷舍

永笠

わさつらの
きりおろしや
さゝわさ

のらくと遊の
姿さへ
鳴居

日一名拔
拔捕も味ふ
ほうぼう魚
巴静

最近比せんう
男女の
ささやき
歌里改

○ゑび　海鰕　紅鰕　いせゑび

朝丸

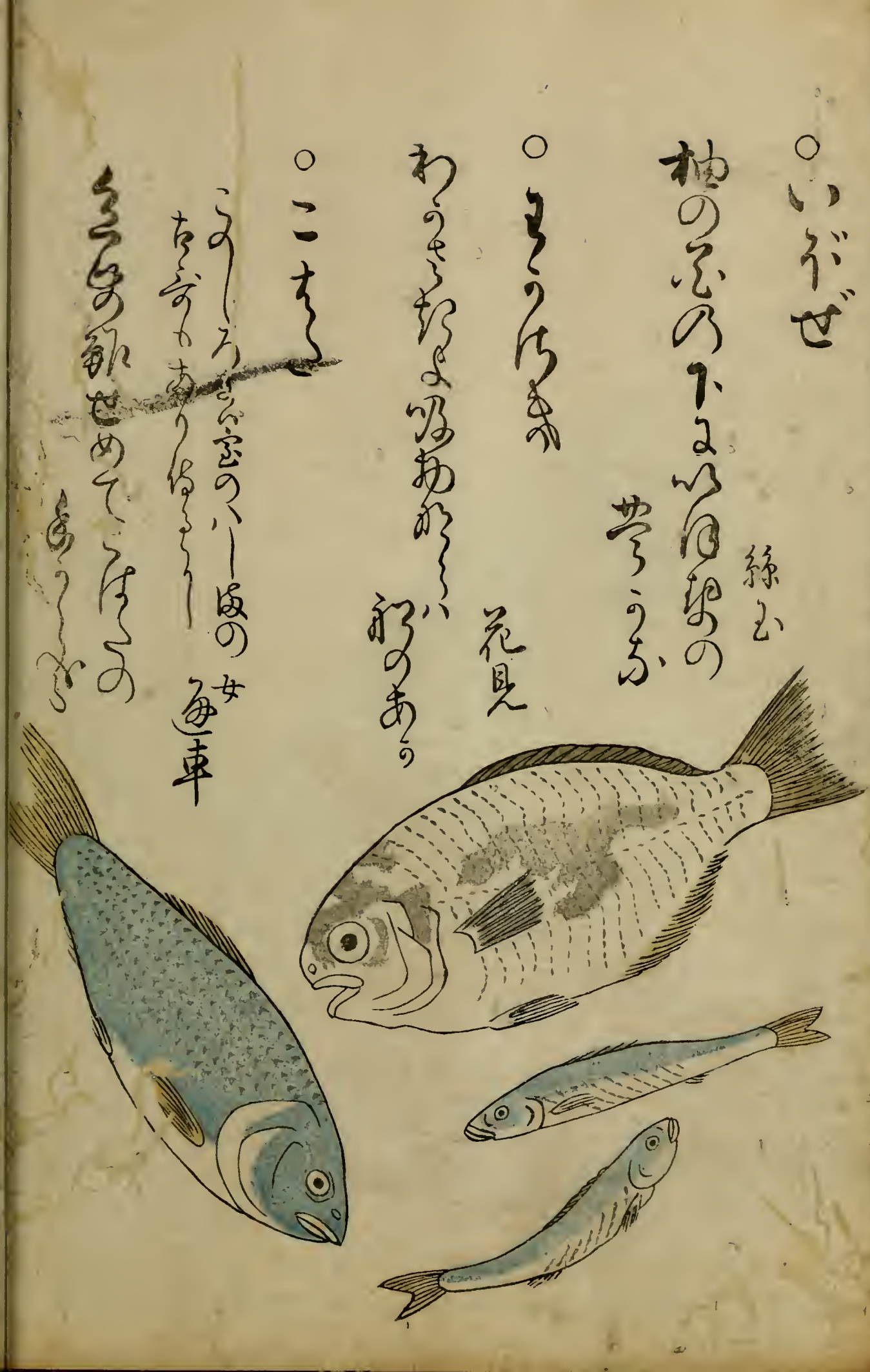
浦波

○いかぜ

柚の花のかをりのごとき

○まつたけ

○こち



○どぜう　泥鰌　泥鰍
鰌魚

来久

みづ出し田舎
どぜう汁の味

新甫亭
在雅

泥鰌うるさくなくの
ひぐれ

芋秀

涼しさハ泥鰌も汗を
ふき出すらん

蘚魚　載帽

○貝尽し

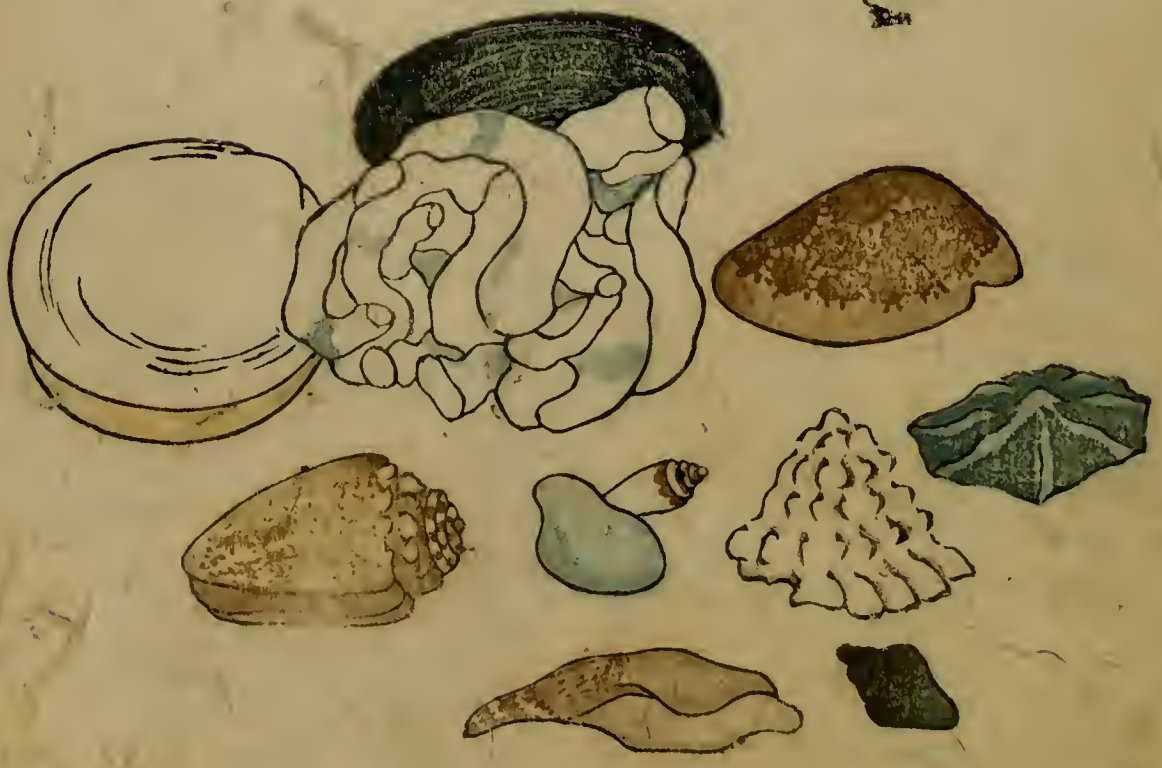
待美

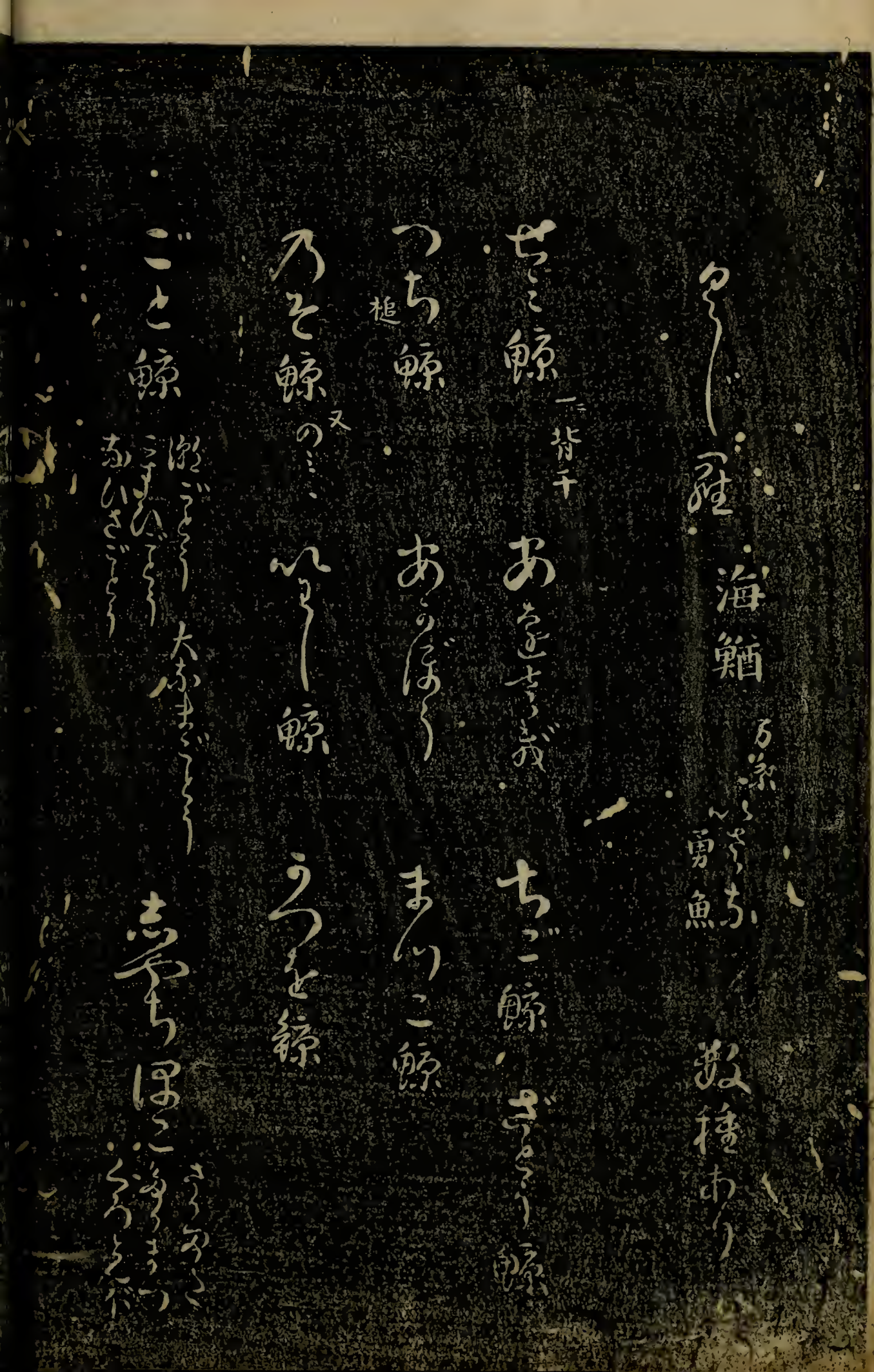
桜貝

節花

籠貝

仙茶

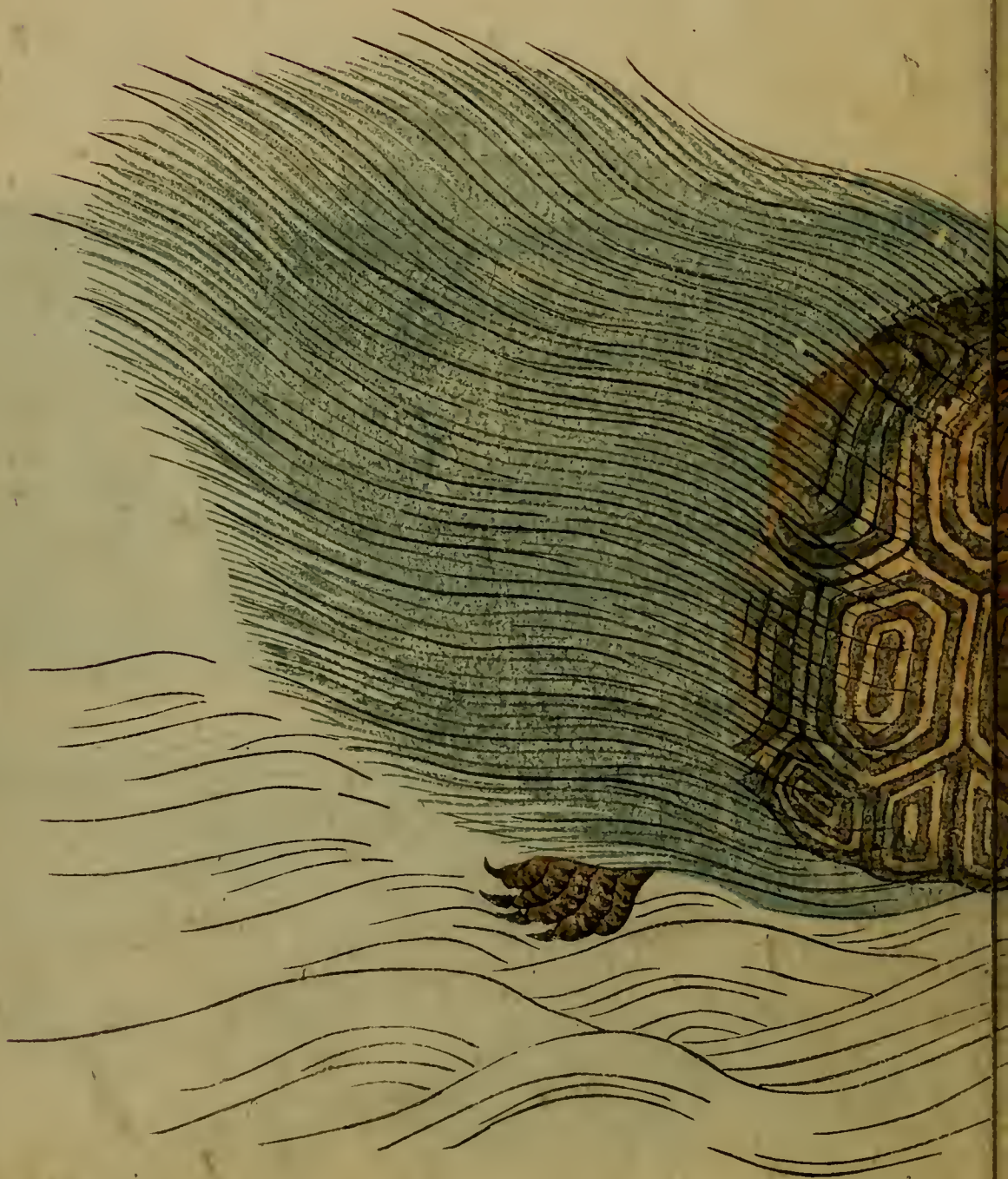



くじら 海鯨 古名いさな 勇魚 数種あり
せこ鯨 一二背干
つち鯨 槌
あを鯨 あをながす
あのほう
ながす鯨 又のみ
ごと鯨 潮ごと 大ふまごと あいさごと
ちご鯨 さつま鯨
まりこ鯨
うを鯨
志ら ほこ さくら

古浦孫八もと名を富蔵と称す　本籍
肥前国平戸領生月島の人なり　産業
漁業にして鯨と海豚とを専業とす　伝記

○緑毛龜

龜の子も
泥もてあそぶ
松の木
茶社よ



歌仙

東海よ白魚の目も涙かな　存義
海苔や否よ ちゝと共一昌　平砌
乙時のすゝこそ汲まん　茶仲
冬の花折よかるや　祝重　祇丞
海山よ桜を朝ぬ ちるまゝに　貫朗
祝ふ重ねもすみわり古庄の海　横川

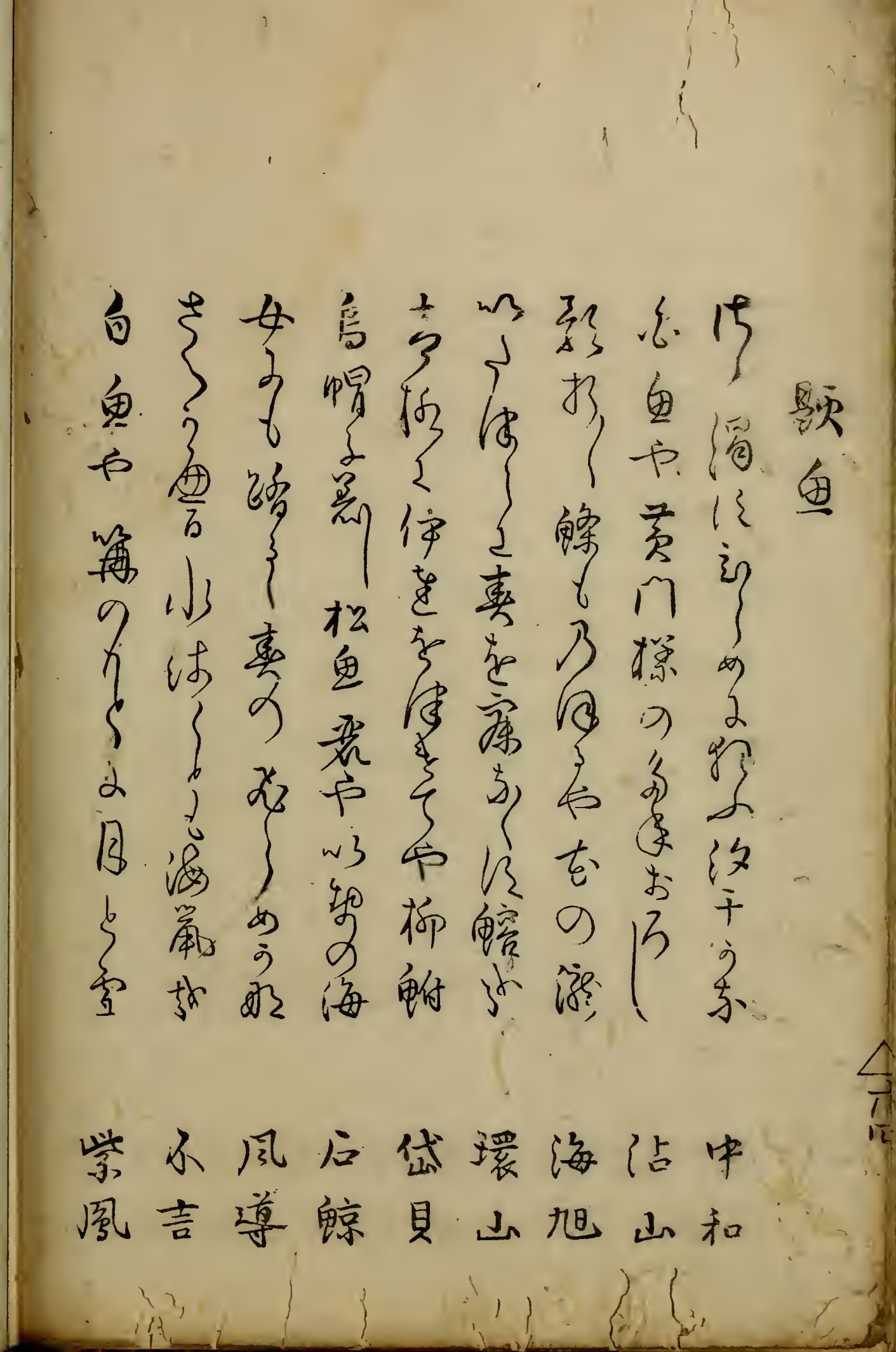
湖十
百萬
紀逸
再賀
雅来

うち出る朝果や筌漂の笹酒里
裏赤行や魚の卵うむ海苔水
来てみてる多くある日や須賀川
牟川のかうたくすくす川
橋をあるかもより渡る頃初
日雀うめく風さしあつた感うめ
夏川や波の吉ふ仕の光
でうそや筏の牧を水を言ふ

素二
超雪
秀信

吉門
梅鶯
鐘口
柳尾
由林
庭壹
清泉
田社
圖大
海如

駿河



題貝

すゝきやす深よそふりす哈
いそそもる湊をふもやたふ貝
吹あらる古屋風めすゝし貝
川裏や岩本沈々月日貝

半呑
葵足
名鶏
金羅

引偈

月忘よあまりて海の華
帳を帳もて夜を尊き妻の目
めろ古への哥のかずかず餅搗て
祢ぎ子出来を甫喜ぬて見る
年の夜松毎の門ごとにさし玄
ろ〳〵園ごの茶よめろ〳〵

秀園
冥明
存義
祇丞
平砂
圭通

明
園
亟
義
亜
砂
明
砂
亜

のめ入給ふ人の嵐ふく
涙の硯石をも捨てかり
旅寝一夜木陰もやいみじと帳
をうち出てゝ筑紫
妻十人許ありける女房皆
ありながら朝鮮の
軍しける志賀海上よりかく
ふく秋の風
体も日数着痛の毛もよ秋の
夢覚給ふ

跋

画ハ詩かたる詩ハ画かたる画ハ詩
俳諧も又然かたるの画ハ詩ハ俳諧
かるんの奥ゝ石壽観秀國勝龍水生の
軍生徒魚ほしを得ゝ是ハ俳句を求め
海の幸と名ほ千二帖ゝ跋をゝ請
芝葦取ゝ序文み貴言ゝ添ゝ給ゝ画一赤
句をゝのゝんゝと巻を再ゝ拝ゝ行ハ古句まゝゝの

磯ハ志ら〻の意乃健〻と云ふ〻ら〻侍ふ〻〻哉
〻〻云ふ〻の魚仏〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
味ふ〻〻と〻云味ふ〻人〻〻〻〻〻〻〻〻時の
景和植物ふ〻と承合を酢を和物を〻〻〻
意矣心よ〻ふ〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻
骨あ〻〻肉ふ〻里味あ〻ん〻と指著ふ〻〻〻〻
〻〻後〻よ由

寶暦十二壬午歳二月

本石町一丁目
書林　龜屋太兵衛

大傳馬町二丁目
彫刻并　關口甚四郎
彩色摺　同　藤吉